

『歌集 202X』

2020年04月20日

「東京新聞」文化欄に、「時代への危機感 詠む」と題して、歌人 藤原龍一郎氏の『歌集 202X』が大きく紹介されていた。藤原氏は、『歌集 202X』の刊行に際し、「あらゆる表現は時代の影響を受ける。短歌が時代に対して存在理由を主張するためにはどうすればいいのかということ、やはり時代を写し出すことなんじゃないか。炭鉱のカナリアの役目として、危機を読者に伝えるような表現ができればいいなと思って」書いていると言う。興味を持って読んでみた。「帯」には「時代に対する危機感を抱き、常に抵抗の意志を投げ掛け、多数に迎合することなく、己の立ち位置を問い続ける。絶望を糧として、暗澹たる時代に撃ち込む一行の詩！」と、衝撃的な言葉が綴られている。

藤原氏はニッポン放送でディレクターとして番組制作を担当していた人で、社会の動きを敏感に察知していた。時代のあり方に怒りをむき出しにぶっつけるような歌集に驚きと同時に、共感を覚えた。短歌を紹介しながら、私の感想を書きたい。

「夜は千の目もち千の目に監視されて生き継ぐ昨日から今日」。ジョージ・オーウェルの『1984年』を読んだ時、こんな恐怖の世界があるのかと、他人ごとみたいであったが、今や、『1984年』が描き出した全体主義的な監視社会に生きている感覚に捕われようになってきた。「スマホ操る君の行為はすでにしてビッグ・ブラザーに監視されている」。ビッグ・ブラザーは『1984年』に登場する絶大な権力を有する管理組織である。権力者にプライバシーを掌握され、生活を管理されている状況にあるのではないか。かつては、資本主義対共産主義の対立であったが、新型コロナウイルス問題から、民主主義対独裁主義の対立に関心が向けられてきた。独裁主義の方が管理がうまく行き、発展も素早いのではないかと見られる向きがある。新型コロナウイルスを抑え込んだ民主主義国もある。人間の尊厳を守る体制を保持することを、今、真剣に考える時である。

「天皇を、否！ 愚かなる総統を撃たねばならぬ 撃てよ！ ヤマザキ！」。奥崎謙三は、1969年皇居の新年参賀で、裕仁天皇を狙って、ニューギニア戦線で餓死した戦友の名をあげて「おい、ヤマザキ、ピストルで天皇を撃て」大声で叫びながら、パチンコ玉を発射した。天皇の戦争責任を問い、死んだ戦友の霊を慰めたいという慰霊の儀式を敢行した。藤原氏は、今、撃たねばならないのは、愚かなる総統であると詠う。安倍政権下で、特定秘密保護法、安保関連法、「共謀罪」の組織犯罪処罰法などが、強行採決で可決された。森友問題で、自殺者が出る「公文書改竄」が行われ、「桜を見る会」では、権力の私物化が露わになった。「加害責任なき棒読みの総統の虚言撃つべしわだつみの声」。「わだつみの声」を書き残した学徒たちに顔向けできる社会を作ることが、戦後、国民が決意したことであった。ピストルは不要であるが、安倍首相を権力の座から引き下ろさなければ、この国の道義が壊れる。新型コロナウイルス問題の対処でも、まるでトンチンカンではないか。

「東京愛国五輪『日本ガマタ勝ツタ！』この永遠の戒厳令下」。健全なスポーツからかけ離れ、国家の威信のみを誇ろうと、また、純真なアスリートたちを用いて、金の亡者たちが饗宴する五輪は、騒がしいだけではないか。五輪をするなら、毎回ギリシアで行い、悲壮感漂う競争ではなく、本来の楽しいスポーツを見せてほしい。

「改憲という暗黒の妄執をこそ撃つべしや戦^{そよ}げ！ 民草」。「民草」という言葉に惹かれる。民草、市民こそが、明日の日本を造るのである。市民が声を上げ、行動する。権力者の最大の期待、願いは市民の沈黙である。「魂を殺すな」が、藤原氏の叫びである。